

北欧民族における比較思想的行為としての「改宗」

——ゲルマン宗教からキリスト教へ——

尾崎 和彦

「比較思想」の概念の歴史が比較的新しいこともあって、現在のところこのタームは、例えば時代的にも地域的にもお互いに直接していい思想圏ないし思想体の比較対照的考察という、極めて「学問的・客観的」色彩の濃い営為として成立しているように思われる。それに対して、質を異にする宗教間の移行、端的に「改宗」(conversio onvendelse)と言われる現象の場合、成立の次元が個人的か民族のかの区別はともかく、そこに見出されるのは、およそ客観的・学問的考察としての「比較思想」などではなく、圧倒的に主体的・実存的な行為としての「比較思想」である。そして、本論が意図するのは、特に一世紀前後の北欧人における「ゲルマン宗教」から「キリスト教」への転向・改宗の問題を、

このような主体的・実存的意味での比較思想的行為の観点から取り上げてみることである。しかし、時代的背景及び資料上の制約から、個人における比較思想的行為としての「改宗」の考察は極めて限定的になるのは避けられず、主たる関心の対象は、結局、一世紀前後における北方ゲルマン「民族」の改宗史にならざるをえない。

さて、ここで「北欧民族」として想定しているのはなかならずくデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、アイスランド四国に帰属する民族のことであるが、彼らのゲルマン宗教からキリスト教への改宗という歴史的事実に関して一つの指標を提供するのはアイスランドの場合である。というのも、この国ではちょうど一〇〇〇年に全島大会 (Althing) においてキリスト教への改宗が法的に許可されるが、デンマークとノルウェーのキリスト教化はそれ

以前、スウェーデンの場合はそれ以後に属するという仕方、前後に約三〇〇年間の落差はあるものの、北欧四国の改宗はほぼこの時代に集中しており、このことが四つの北欧民族における改宗に共通する特質を付与する要因にもなっているのである。そして、彼らの改宗に共通するこの特質こそ、彼らの「比較思想的行為としての改宗」を決定的に特徴づけているものであり、その発見と指摘が本論の意図するところでもある。

そのためにわれわれはまずアイスランドを中心とした改宗への「外的経過」を簡単に窺うことによって、外から見た北方ゲルマン民族における改宗の一般的特質をあぶり出してみることにする。スカンディナヴィア諸国のこのキリスト教化について、デンマーク考古学界の権威ヨハネス・ブレンステーズは、このように述べている。

「スカンディナヴィア諸国への）キリスト教の浸透は急速なものではなかった。ヴァイキング時代の始まる八〇〇年頃の北欧はまったくの異教世界で、デンマークの改宗までは約一五〇年、ノルウェーとアイスランドでは約二〇〇年を要し、スウェーデンが完全にキリスト教化されるまでは三〇〇年以上が経過した。この穏やかな慈悲と苦難の宗教が、ヴァイキングをどのようにして征服することができたかを問うよりも、改宗にこれほど長時間を要したことにむしろ驚く理由がある。というのも一方は多彩な神々の王国ではあっても、実

際にはそれほど強力ではなかったのに対し、もう一方はローマ教会の巨大な組織を背景に浸透の試みを不断に繰り返し、手始めに王や首長ら北欧社会の上層階級を懐柔するという巧妙な戦術を所有していたからである。だが、改宗にかなりの時間を要した理由とは、北欧古来の宗教に秘められていた力が、代々継承されてきた祭祀、つまり一年の歩みや生命の豊饒さや収穫と不可分に結び付いた祭祀形態の中に宿っていたことであろう。上層階級に対する改宗はほぼ順調に行ったが、この新しく強力な唯一神が社会に根付く過程で、それまでヴァイキングの現世生活の要求と存在を確かなものとし、あらゆる時代の経験を備えた古来の宗教の風俗習慣が侵害されようとしたとき、初めて事態は深刻となった。この領域における転向・改宗が実に長い歳月を必要としなければならなかった。」⁽¹⁾

スウェーデンの宗教史家フォルケ・ストレームも、ヴァイキング時代多数の北欧人が海外でキリスト教とじかに接触し、新しい思想を携えて帰国したものの、全般的にはこの地域に定住していた農民人口が父祖伝来の信仰を頑固に固持するという仕方、宗教と社会生活との間に存在する強い結び付きのために、当時の北欧においてはキリスト教は根本的に社会の下層階級の運動にはならず、この地のキリスト教伝道は、宗教や法秩序の支柱、つまり王や権力者に向かったところにその特質が存在することを指摘し

ている。⁽²⁾そして、フォルケ・ストレームは、ブレンステーズが上記引用文において指摘する、豊かな時代の経験を有する古来の宗教の風俗習慣が侵害される基本的な場面として、社会全体にとって重要な意義を有する公的な祭祀の維持者（王・権力者）がもはや自らの伝統的な祭式機能を發揮しなくなることによって、国民大衆が個別的に執り行なう屋敷内の祭祀が単独では埋めることができない宗教的な真空状態の発生を挙げている。インターナショナルな志向性を有するキリスト教徒の王の権力と、村落に根付く古い宗教を奉ずる農民の勢力との間に、たとえ一時的に激烈な闘争があったり、ゲルマン異教からの反動が短期間成功を収めることがあったとしても、結果は始めから明らかであったのである。

デンマークの著名な宗教史家ヴィルヘルム・グレンベックの、スカンディナヴィア諸国における改宗過程の特質に関する以下のごとき発言も、このような歴史的事情を踏まえてのことである。

「スカンディナヴィア諸国においては、改宗は全体として見ると、それほど深刻な格闘なしに行われた。このような精神革命が若干の抵抗を伴うのは当然のことであった。実際われわれもオーラフ一世トリュグヴァソン（Olav I, Trygvason 995-1000）や聖オーラフ二世（Olav II den Helige 1015-30）のように改宗に熱心だった王と国民との摩擦があったことを承知しており、特に前者は乱暴な方法を用いたために彼らの不満を相当掻き立て、この国の各地で大きな抵抗が

見られ、あちこちで古い信仰への殉死者が出たのであった。しかし、南の方角から勝利を収めつつ突進してきた宗教に対する敵意の意味での戦いについてはまったく問題にならない。その移行がどんなに容易に行われたかをわれわれはアイスランドにおいて発見することができる」⁽³⁾。

特に以上デンマーク及びスウェーデンの代表的な三人の研究者ブレンステーズ、ストレーム、グレンベックの所論を総合してみると、

(1) オーラフ・トリュグヴァソン治下のノルウェーのように若干の場合は例外として、また新宗教勢力と旧宗教勢力との間で後者への殉教者の発生を交えた短期間若干の信仰闘争が発生したとしても、北欧の場合、アイスランドにおいて典型的に見られるように、ゲルマン異教からキリスト教への転換は自明的な仕方では比較的平穩裏に行われた。

(2) その反面、アイスランドの一〇〇〇年を挟み、スカンディナヴィアの他の三国のキリスト教化がその前後に三〇〇年という長期間を要した理由は、ローマ教会の懐柔策に嵌まってまず改宗した王や首長といった権力者が国民を啓蒙するという仕方でもキリスト教化を謀ったものの、伝統的の社会を支えてきた異教の公的祭祀の主催者としての役割を放棄することによって、国民の間に一種の精神的な真空状態もたらした権力者にとっては、当の国民大衆の伝統と日常生活の中に深く織

り込まれた伝統的な異教祭祀を慈悲と苦難の新宗教へ一気に、かつ短期間に移行させることは不可能であったためである。

しかし、北歐人にとっては、この移行・改宗の運動自体は、もはや避けられない必然的運命であった。

さて、ブレンステーズはまた以上の事態を踏まえて、「全島民の同時改宗という他に類例のないこの奇妙な方法自体、すでに島内的には改宗の機が熟していたことを証明している。古来の宗教はアイスランドでは早くも無力化していた」とも述べているが、これは、「社会生活と法と宗教との間の不可分な結びつきをめぐる洞察が、異教の運命を確かなものにするに至った」(フォルク・ストレム)という意味に理解しなければならない。そして、このことはまた、アイスランドにおけるゲルマン異教からキリスト教への転回は前後裁断的・二者択一的な決断の行為とは言いがたく、むしろドイツの宗教史家アドルフ・ヘルテがその著『ゲルマン精神とキリスト教の遭遇』の中で提出した、『エツ』や『サガ』の故郷アイスランドでは、異教は原則的には排除され、改宗は遂行されたものの、改宗は国民にとってもとより心の問題ではなく、所詮はまったくの外面的な事象にすぎず、異教に託されたこの留保の姿勢こそこの島におけるキリスト教への移行を本質的に特徴づけるものである⁽⁴⁾、という見解こそが、この北歐ゲルマン民族の改宗の真相を突いていると見なすことができよう。もっとも彼も、オーラヴ二世聖王が一〇一六年に異教に対する一

切の譲歩排除を命令して以後、漸次異教が消滅してゆき、アイスランド人の中にキリスト教的思惟と感情が根付いていったことを認めてはいる。

しかしながら、アイスランドにおける改宗のこのような特質を知るとき、われわれはドイツの著名なゲルマン宗教史学者ヴァルター・ベトケが提示した、以下のごとき主張に最高に注目せざるをえないであろう。

「当然異教の抵抗力が新しい信仰の受容に対して影響がないはずはなかった。スカンディナヴィア諸国では、ドイツの場合同様、キリスト教の容認にはさまざまな強制力が用いられ、かくて移行期間には(ゲルマン的)キリスト教的シンクレティズム(ein germanisch-christlicher Synkretismus)が展開されたのである。この(シンクレティズム)は確かに部分的にはその後克服されはしたが、しかしまた一部はさらに強化されて(sich konsolidierte)、結果的には(大規模なキリスト教のゲルマン化)(eine weitgehende Germanisierung des Christentums)をもたらすことになるのである。もしキリスト教の内的獲得を問うのであれば、この混合—変形過程(Vermischungs- und Umformungsprozess)の在り方と範囲を確認することが重要になる⁽⁵⁾」。

アイスランドにおける改宗は全島会議の議決に基づく政治的配

慮の結果でもあったが、ベトケは、このような便宜の方策のみならず、ドイツ同様スカンディナヴィア諸国においても、ゲルマン異教徒の抵抗を押さえるために彼らの改宗にはさまざまな仕方**で強制力が用いられたことが、結果的に「ゲルマン的要素とキリスト教的要素との混合形態」という意味での「シンクレティズム」が古代北欧民族の改宗を特徴づけることになったと考えており、さらにこの「シンクレティズム」がある程度克服された後には、よりラディカルに「大規模なキリスト教のゲルマン化」が発生したと主張しているのであるが、ベトケのこのような所見は、北歐人における比較思想的行為としての改宗を考察しようとするわれわれにとって極めて示唆に富む発言であり、以下におけるわれわれの論述は、結局基本的には、ベトケの指摘する北歐人の改宗における「ゲルマン的なもの」と「キリスト教的なもの」との「シンクレティズム」「キリスト教のゲルマン化」という「混合―変形過程」論の吟味に向かわざるをえないであろう。**

二

ベトケは、すでに指摘した「政治宗教」としてゲルマン宗教の理念がキリスト教に転換された結果、改宗に際してキリスト教が政治共同体の平和が託された民族の、国家の神として把握され、古いゲルマン異教に代わって政治的な自己主張のためにキリスト教が用いられるところに、このような「シンクレティズム」の発生

を洞察している。北歐に限定されず、ゲルマン世界全体に共通すると見なすこの現象を綿密に検証しつつ、さらに本来はゲルマン異教の主神オージン (Öðinn, Wodan [南ゲルマン民族]) の別名「勝利の神、勝利の主」(Siegsgott, Siegherr) と、いった古い表象がキリストに移され、「このような勝利の神として賛美することによって、異教ゲルマン精神によるキリストの神話化と政治化とが結びついているのは紛れもない事実である」⁶⁾、「キリスト像の政治化と神話化の認識がまさしく改宗史にとっては最大の意義を有する」のである。なぜなら、「この認識が始めて文献資料の妥当な解説の前提となる」からである。かくて、ベトケによれば、本来は完全に区別されるべき「ゲルマン的―神話的地層」と「キリスト教的―神学的地層」でありながら、前者が後者に移行・転換される仕方で両契機が共存するところに「シンクレティズム」のみならず、「キリスト教のゲルマン化」の現象が生起するのである。なお、その際ベトケは、改宗期の「ゲルマン初期キリスト教」の資料から「ゲルマン異教」への「逆推理」を行って、福音に対する素因をゲルマン人がすでに改宗前に所有している素因の充足・完成」を見るような転倒行為を行ってはならないことを厳しく注意している。

なお、ベトケは否定するのであるが、C・M・クサクは、ゲルマン民族改宗史に関する最新の文献でもある彼女のシドニー大

学宗教学学位論文『ゲルマン民族の改宗』において、アイスランド人の初期キリスト教が他のゲルマン民族のそれ同様「混合主義的」(syncretistic)たるゆえんを、ベトケ同様、全島会議の結果として古い宗教が公的には差し止められたにもかかわらず、私的にはなお暫時生贄の慣習が守られた事実の中に指摘し、アイスランドに強力な中央集権が存在せず、また信仰簡条も教義も有しないというゲルマン異教の特性が、この宗教の残存とキリスト教の

ルーズな受容と解釈を可能ならしめたと見ている。なお、クサクは、このような「シンクレティズム」は、同時代のアイスランド民衆の中に発見しうるのみならず、さらにキリスト教徒としてスノリ・ストゥルルソン (Snorri Sturluson c. 1179-1241) がゲルマン宗教に深い関心を寄せることによって成立した『新エッダ』(c. 1220) が「シンクレティズム」の色彩を色濃く湛えているのは当然として、さらに『古エッダ』において生贄の樹にわれとわが身をぶら下げたオージンの像と十字架上のイエス像を重ね合わせ、さらに善と光の神バルドルとキリストとをダブらせることによって、そこにゲルマン異教における「シンクレティズム」の存在を見ようとする一部の研究者の試みに留意しつつも、これらのイメージの創造にキリスト教の影響があったとは考えられないとして、こういった試みには懐疑的である。しかし、中世ヨーロッパ文学中最高傑作と称えられる『古エッダ』冒頭の詩編『巫女の予言』(Völuspá = Völva「巫女」+ spá)「予言」の場合事情

がまったく異なるという観点から、特にこの詩編の後半のラグナロクの場面に登場する宇宙の「破滅」と「復活」の場面を根拠として、異教的・ゲルマン的な価値観とキリスト教的価値観との混合という「シンクレティズム」が、さまざまなゲルマン民族における「改宗」の当然の帰結を実証していると主張する。

ゲルマン宗教研究史上最高の碩学とも呼ぶべきオランダのヤン・ドゥ・フリースは、『古代ゲルマン宗教史』において、「当時の北欧民族は純粹に異教的でもまたキリスト教的でもなかった。これら二つの信仰表象の結合が独自の混合形態に導いたことは間違いない」と語ることによって、ベトケやクサク同様北欧民族における改宗を「シンクレティズム」によって特徴づけている。この点をフリースは、改宗期には古い習慣はそれがキリスト教の要請に適用される場合にのみ維持できたのであり、異教的なものが漸次形式のみになって、内容はキリスト教的なものによって満たされるという「混合形態」という意味での「シンクレティズム」としても把握している。そして、この混合形態の特徴は、相互に異質な要素が外面的に併存しているとか、キリスト教的なものが異教的な迷信にくっついていたりといったことにあるのではない。アクセントの置き方こそ違え、異教的なものとはキリスト教的なものとは同一の感情を共有しているのである。換言すれば、一世紀を中心とした北欧ゲルマン民族の改宗を決定的に特徴づけている「シンクレティズム」とは、フリースの言う、まさに

「キリスト教的な感情・表象と異教的な感情・表象との合奏 (Zusammenspiel)」なのである。「(古代北欧の) 人々は何千本の糸によつて古い世界と結ばれていた。前時代は一挙には止揚されなかつたのである。異教時代の詩の伝統が可能だったのは、このような異教的感情の産物に対して敵対的に背を向けず、逆に神話的伝承を守り続けたからであり、紛い物に対するキリスト教の憎悪も、過去の遺産に対する愛情を押し付けることができなかつたのである。われわれの最も重要な資料が保持されているのは、このような心の広い寛大さのお陰である」。

しかしながら、フリースは、「シンクレティズム」の内実をこのように「キリスト教的な感情・表象と異教的な感情・表象との合奏」という二つの宗教の調和的關係を意味するものと解する一方では、ペトケヤクサクと異なり、『巫女の予言』の詩人に対してはこの「シンクレティズム」というタームを適用していないのである。それは、なかんずく「心の中でキリスト教と異教との葛藤が激しく荒れ狂った人間」として把握しているからである。

しかしながら、その内実を二つの宗教の調和關係として捉えるか葛藤關係として理解するかの違いこそあれ、この点を踏まえさえすれば、何れの場合に対しても「シンクレティズム」のカテゴリを適用することは不可能ではないと考えられる。

デンマークの宗教学者ウィルヘルム・グレンベックによれば、北欧人にとっては、「中世の歴史」というのは、いかにしてキリス

ト教が定着し、ますます純粋な形を取っていったかの物語ではなく、北欧民族的要素と教會的要素とが一緒に働いて、精神生活及び宗教の有機的な全体像が前進して行く方向線を作り出した、その不断の成長の物語なのである」¹¹⁾。そして、このように「北欧民族的な要素」と「教會的要素」、「ゲルマン的なもの」と「キリスト教的なもの」との共存と共働によつて誕生した精神的な全体像としての「新たな一つの宗教」であるという、グレンベックのこのような理解において、「シンクレティズム」概念の内包は、その最も深遠な意味を披瀝するといつてよいであろうが、このようなグレンベックの見方は、北欧神話中最大の雄編『巫女の予言』(Völuspá)を、まさしく「ゲルマン的なもの」と「キリスト教的なもの」との「シンクレティズム」によつて成立する「一つの新しい宗教」を告知するものという画期的な見解の中に披瀝されている。彼は言う。『巫女の予言』においてわれわれは、その思想が強烈な人格的色彩で染め上げられ、それゆえ疑いもなく同時代人の平均的思想を超出する一人の詩人に遭遇する。この詩はキリスト教と異教両者の外部にある新しい宗教の記念碑と称して然るべきである。この宗教は、最も本来的な意味では恐らくただ一人の人間の中でしか生命を保ていなかったものであろう」¹²⁾。

かくて、一般には「シンクレティズム」なるタームをもつて特徴づけられるゲルマン異教からキリスト教への改宗が、個人の最も深刻な場合、まさに「心の中でキリスト教と異教との間の葛藤

が荒れ狂った」一人の単独者の苦悩に満ちた「比較思想的行為」に他ならなかったことを証明したもののこそ、教養高き異教神官と推定されている『巫女の予言』の詩人に他ならないのである。⁽¹³⁾

- (1) Brynsted, Johannes : Vikingerne, Kbh. 1969, 236f..
 - (2) Ström, Folke : Nordisk hedendom. Tro och sed i forkristen tid, Göteborg 1967, 262.
 - (3) Grønbech, Vilhelm : Die Germanen, in : Lehrbuch der Religionsgeschichte von Chantepie de la Saussaye, Tübingen 1975, 81.
 - (4) Herte, Adolf : Die Begegnung des Germanentum mit dem Christentum, Paderborn 1935, 42.
 - (5) Baetke, Walter : Die Aufnahme des Christentums durch die Germanen, Darmstadt 1959, 25.
 - (6) *ibid.*, 49.
 - (7) *ibid.*, 51.
 - (8) Vries, Jan de : Altgermanische Religionsgeschichte, Berlin 1970, Bd. II, 429.
 - (9) *ibid.*, 447.
 - (10) *ibid.*, 444.
 - (11) Grønbech, op. cit. 85.
 - (12) *ibid.*, 90.
 - (13) 『巫女の予言』については、拙著『北欧神話・宇宙論の基礎構造——〈巫女の予言〉の秘文を解く——』白鳳社、一九九四年参照。
- (オキナホ・カネヒシ) 哲学・北欧学、明治大学教授)